神戸新聞 2021年11月22日 月曜日 面名 ター タ4 1ページ

随想

語る力

山上 信吾

大使になって身に沁みたのは、在外公館で勤務する外交官と本省で勤務する外務官僚とでは、必要とされる能力や資質に大きな違いがあることだ。

外交官の仕事は、大きく分けて三つある。人脈の開拓、情報の収集、対外発信。どれをとっても、組織の神輿（みこし）の上に座っていて事足りる仕事ではない。キャンベラにあっても、相手のオフィス訪問、レセプション・朝昼夕食会・社交行事への出席、講演、マスコミとのインタビュー等を根気よく地道に繰り返しながら、この三つを進めていく必要がある。

幸い、豪州では日本の外交官は大事にされる。2番目に大きな貿易相手国・投資元であるだけでなく、安全保障面での協力も年々重要になっていることを多くの豪州人が認識しているからだろう。

だからと言って、常に順調に進むわけではない。努力次第で雲泥の差が出る。初対面の政治家や高官とは、まずは相手のオフィスを訪問した後、昼食や夕食に招待して関係を築いていくのが外交官の常道。だが、つまらない奴と判断されると、2回目以降会えなくなる。

「語る力」が重要なゆえんだ。対外発信は勿論（もちろん）のこと、人脈の構築、情報の収集に当たっても必須だ。インテリジェンス担当の局長時代、情報は「ください」といって得られる甘い代物ではなかった。こちらが提供する情報や披露する分析に応じて、得られるものの量と質は千差万別となる。

大学で教鞭（きょうべん）を執った経験からしても、日本では、「語る力」を伸ばす教育が極めて弱い。理路整然と他者を説得する訓練が、決定的に不足している。そうした弱点を背負っているだけに、外交官は日々これ鍛錬である。今日も打って出ようと思う。（駐豪州日本大使）

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。